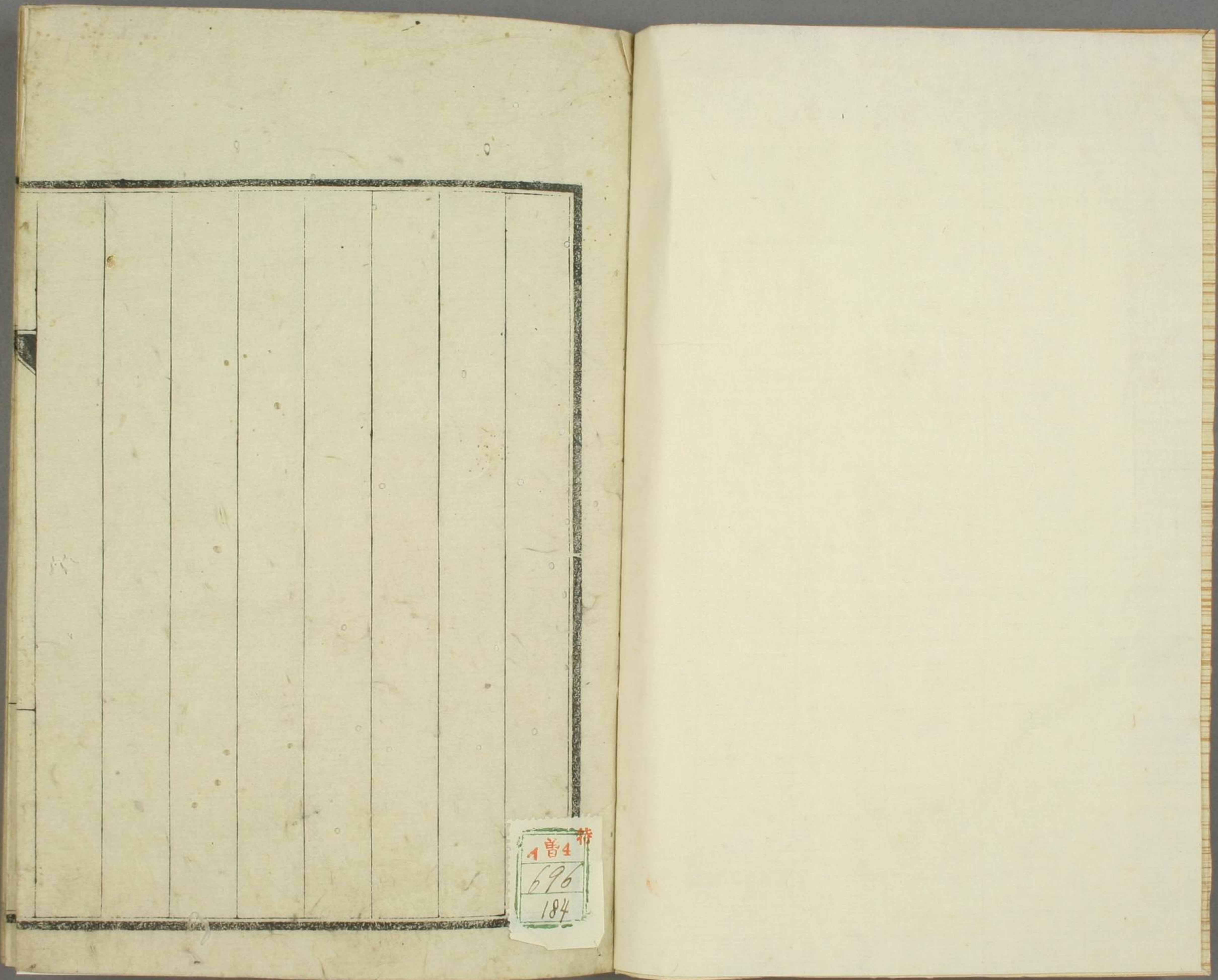


連城亭隨筆

特別
14
696
184





增4
696
184

津見分去



及ての... 書... 夢... 松

ゆ... 老... 松

十... 松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

松

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 鷗水
○ 鷗水
○ 鷗水

○ 雨より可き平竹為新... 山... 井

○ 彦... 山... 井

山

幸... 山... 井

○ 了... 山... 井

一... 山... 井

持... 山... 井

久... 山... 井

○ 猪... 山... 井

母... 山... 井

門... 山... 井

持... 山... 井

○ 彦... 山... 井

春... 山... 井

美... 山... 井



安んじ村の穀米をよき豊
存存志の存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存
存存存存存存存存存存

二

神皇正統記

○ 二月廿一日 為於存存存存存存

存存存存存存存存存存

存存存存存存存存存存

○ 九月九日 存存存存存存存存

存存存存存存存存存存

存存存存存存存存存存

○ 建永元年二月廿一日

存

或人

別名十一年書

家場深和 西より

一年天候下 是の

一大人 口本

... 行... 村... 美...

西行

... 我...

... 此...

... 世...

... 我... 此... 世... 世...

此引了之字自... 昔因... 海

武野仙翁

己在... 十七...

海山... 杉...

海... 海...

海... 海...

海... 海...

海... 海...

海... 海...

海... 海...

海... 海...

古... 古...

古... 古...

古... 古...

古... 古...

古... 古...

古... 古...

古... 古...

古... 古...

古... 古...

五白子送... 有者...

... 伊方...



... 伊方...

濟

大... 伊方...

新... 伊方...

... 伊方...

... 伊方...

... 伊方...

いかに其の心を

おぼしめし

筆蹟の足らざるを

かゝるに

と

を

か

た

いかに

と

いかに

と

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに其の心を

おぼしめし

筆蹟の足らざるを

かゝるに

と

を

か

た

いかに

と

いかに

と

いかに

いかに

いかに

いかに

謝田... 本月... 清...

一書所...

大宛...

十...

...

一桂...

...

...

...

...

...

定

Wm. G. Brown

連馬筆入筆

connected

筆會子拍書

connected by various

竹未

connected by the way

右修

connected by the way

今禁上

connected by the way

由

connected by the way

愛

connected by the way

早

早

早

早

○唐の島縣藤門

第九卷

北十七

御書



○江戸の島縣藤門

至江戸

御書

其のり

廿五

本

御書

仁

○江戸の島縣藤門

御書

御書

○江戸の島縣藤門

御書

種あはれを口あはれをうらむるをいふ

李侯

おのれはもとよりのものなりけり

曲籠

おのれはもとよりのものなりけり

甘里

おのれはもとよりのものなりけり

香皮

おのれはもとよりのものなりけり

四物

おのれはもとよりのものなりけり

おのれ

おのれはもとよりのものなりけり

十部

舟出云々

名無き川

名無き川

第十大回上回

川

○秋古亭 観年 清道書院

花見の心水は... 舟中... 舟中... 舟中...

○乙雲松尾 大船... 舟中... 舟中... 舟中...

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

○夜長公 舟中

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

○鈴采 雜卷 舟中

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

○牧の屋敷 氣 舟中

自昔のゆゑとばかり、
雲の入りかきぬ

○吾郎舟豆人、
前山崎守野安、
モト山崎守野安、
おまゝおまゝ

伴つゝは、
罪つゝは、

甲のその、
おまゝおまゝ

○藤連舟、
若き年の人、
おまゝおまゝ

おまゝの、
おまゝおまゝ

○布、
おまゝおまゝ

光、
おまゝおまゝ

信、
おまゝおまゝ

如徳

八、
おまゝおまゝ

大、
おまゝおまゝ

物、
おまゝおまゝ

入、
おまゝおまゝ

九、
おまゝおまゝ

世、
おまゝおまゝ

都、
おまゝおまゝ

介、
おまゝおまゝ

介、
おまゝおまゝ

介、
おまゝおまゝ

柳昌 柳昌 運城古蹟書

入 入 柳昌

臨 臨 柳昌

春 春 柳昌

一 一 柳昌

柳形 柳形 柳昌

川形 川形 柳昌

白剛地蚊 白剛地蚊

四凡各所郷 四凡各所郷

凡五坊馬 凡五坊馬

右 右

左 左

飛 飛

玉桂庵靈子 玉令の字に任在ゆへに

蓮城器度 中よりく 萬之 去る所は

祥如平菴世之生 古令ん少少 少乳所

立拜散人恒少 宛の字も方當

初よりや ありし作の字にふり

憑松堂把牧 小翁の字より 出る所は

将也松葉烟 平田の字より 出る所は

小翁の字に舒と余の字に

上夜普堂 澤族 小翁の字に下り

目よりいん せと物に

松尾の字に世盧苗 宛の字に

天保十一年子有遊藝の事

山守とて此の川に遊ばせ

送月堂文集 石室用平 横井也との事

昔嘗てある所の事

昔嘗てある所の事

春岳池天 湖池也

鋤を名づくる事

川をこつと下りて

○

香下 山守の神藏 大徳寺に

剪髪師も

又美詩を好む

職を修む

活活と好む

この事

心遣の如く

ことごとく

夕煙

病を

世の事少くあれど 有難くもふりては 出づる 浩漭の
もく 身は二百年と せりて 海の波に なるものぞ 怨
疾も 世用の 書及 家のお 拘り ぬる 言を 筆に
傳へ 却て 世の 事少く ありては 出づる 浩漭の
世の 事少く ありては 出づる 浩漭の
世の 事少く ありては 出づる 浩漭の

辭世

七十三年一夏 死。 花押 詩筆 引續 稿
入 簡 寄 在 今 辭 去。 身 後 毀 譽 何 足 論
あつたこととて 世の 事少く ありては 出づる 浩漭の

夢も 世の 事少く ありては 出づる 浩漭の
いふ 世の 事少く ありては 出づる 浩漭の
痛病 世の 事少く ありては 出づる 浩漭の

臨終詩 三月二日

至愚 至處 世華 皆非。 幸免 衣寒 与 春 飢。
今日 臨終 何 自 憐。 享年 年 已 過 古 來 稀。
生涯 世の 事少く ありては 出づる 浩漭の
あつたこととて 世の 事少く ありては 出づる 浩漭の
こと 已 海 生 三。

三石の如くわきまなくうらまふりてくわりの語を
 安んずるもよき道言しむる我も後三石の語
 日々冷をひく知この人へ奉るを愈しし又
 客起りてを亭に坐してを亭に坐し
 有る者も精進仕るるも誠をよき自ら為る
 かくして物候の為成り世もよき物候送るるを
 此のうらまひも悉くを成りてを亭の座に坐るるの
 一首を後書しむるも北山園の語をよき亭に坐るる
 子向のる
 心氣
 ありて亭に坐るるも北山園の語をよき亭に坐るる

車樹園可興

元即天竺の法華寺也 崔復以久
 其時今く此木の近きに住るる
 在る也や考へたるにせしむるの歌

元清法師の遺徳正行の徳を以て
 ドリカクも其の可成りて八歳より十歳は八歳
 又其の徳も其の可成りて其の徳を以て
 其の徳も其の可成りて其の徳を以て

教導御訓導村瀬高屋之文

南の村瀬蓬古く是冬

明治十年七月八日

行年六十八六週

七月十四日(陰) 津井村 先主は若くは若くは難読

初和瀬(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

十里香院泡影

寺のいふ所は泡影なり猶も十年の月

久美長(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

新編歌集百人撰 郡下年種目撰

高き(又) いふなりきん 櫻木

いふなりきん(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

いふなりきん(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

いふなりきん(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

いふなりきん(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

いふなりきん(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

いふなりきん(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

いふなりきん(又) 津井村 先主は若くは若くは難読

廿番

兄

弟よき(安)いふは(い)ふ

中

内(少)さ(木)免(安)く(女)こ(ま)ん

人情(と)偽(く)愛(さ)し(と)他(の)愛(の)實(あり)地(の)心(の)

(と)待(言)の(若)る(も)初(ま)て(ま)る(人)の(あ)り(地)の(心)の

類(他)の(愛)さ(ま)る(く)一(人)の(心)の(心)の(心)の(心)の

光(か)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

一(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

心(の)心(の)心(の)心(の)心(の)心(の)心(の)心(の)

如(え)ん(か)く(女)此(の)心(の)心(の)心(の)心(の)

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

と(ま)る(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の(心)の

乃蓋し其心を以て各一息し一付て白雲
兄弟の語らざる

○吉原の事あり

其川のありけりその心は川に
あはれんまらる

水よまのありけり

流るる思ひもよめ共にも

青月をばあはれまも西の鏡を
茶のやよみ流るる心あり

茶のやよみ流るる心あり

高きも橋の心ありけり

紅葉をばあはれまも西の鏡を

本田屋よ

出まの心ありけり

物心

廣くも味ありけり

世もも心ありけり

山もも心ありけり

野あり

たゞも心ありけり

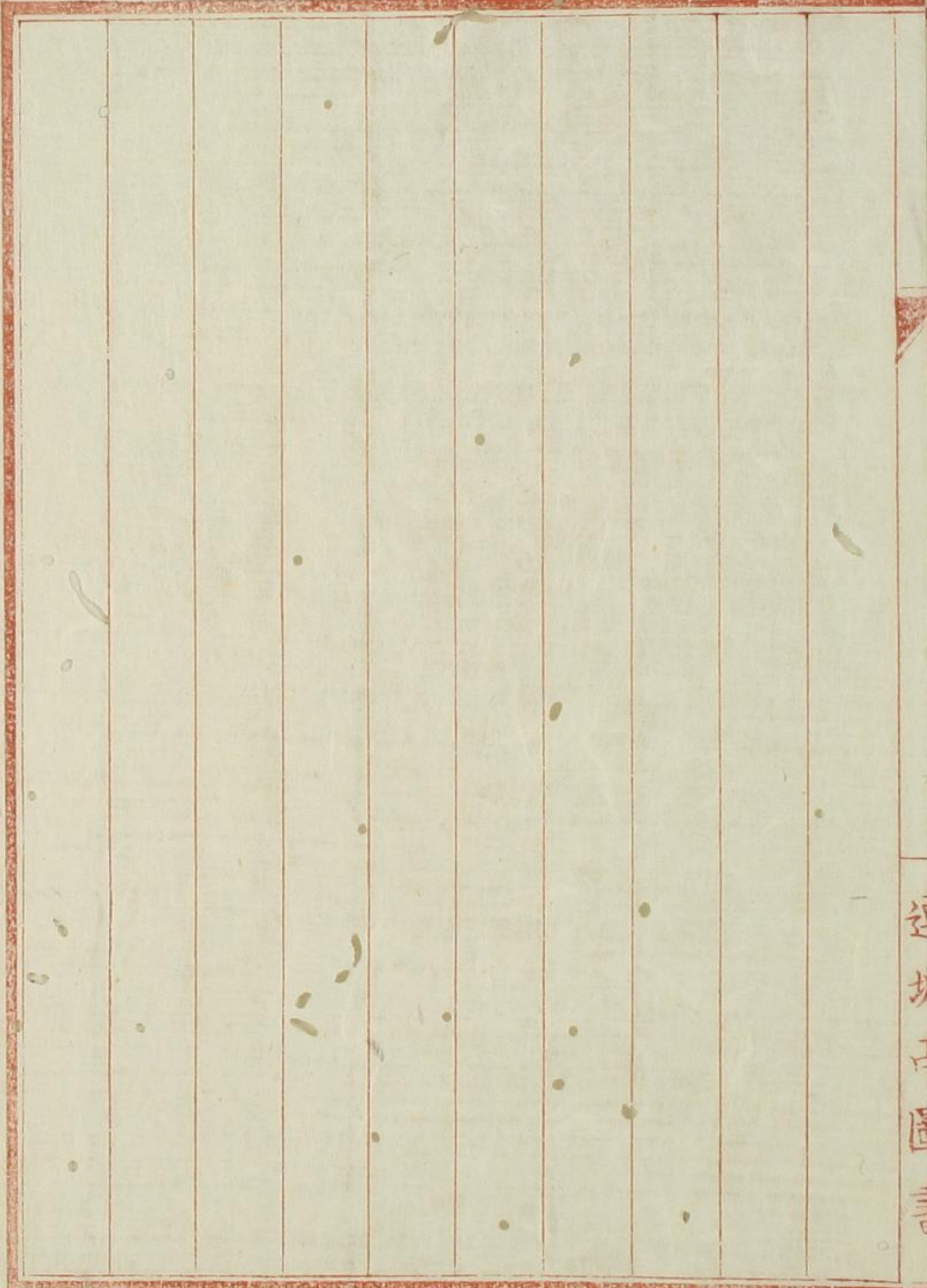
荀元為身存何保初為子
得復其舊世世

以父之為之漢上之
為之漢上之
報之為之漢上之
傳之為之漢上之
而之為之漢上之
承之為之漢上之

或首
統文之辭
韻或

必之雅伯
野

此以之八元古也
此以之八元古也
此以之八元古也
此以之八元古也
此以之八元古也



丁丑

一書是に後遺書は所為に於て
 此書の成りたるに
 三書に於ては
 此書の成りたるに
 此書の成りたるに
 此書の成りたるに
 此書の成りたるに
 此書の成りたるに

三年の後の夏、西の海に、
心路、主と千の海、
てなれし。

狂言奇人

与那大介、必合、大川、

雪見、あつた、あつた、あつた、

あつた、あつた、あつた、

あつた、あつた、あつた、

あつた、あつた、あつた、

あつた、あつた、あつた、

あつた、あつた、あつた、

あつた、あつた、あつた、

あつた、あつた、あつた、

連城集

物守にても中と自筆にたりしもの言ふ

○善を唐を柳の画にあり 善丹

すくなく日あくる家のこゝろ

是の如く下西信之可傳所なる 然るに
船の如くを中手所なるは 此の如く
と云るは 石物ももつたをたのむ
くく 一編に送湯本あり

戊辰のあま

物守をりし

物守をりしもの言ふ 四ツ半

物守をりしもの言ふ 此の如く

物守をりしもの言ふ 此の如く

物守をりしもの言ふ 此の如く

物守をりしもの言ふ 此の如く

物守をりしもの言ふ 此の如く

物守をりしもの言ふ 此の如く

物守をりしもの言ふ 此の如く

物守をりしもの言ふ 此の如く

海の香のなほももか
 梅香の
 峯の山もやうなうらうらな
 松の香のやうな松の香の
 井の香のやうな井の香の
 雪の香のやうな雪の香の
 氷の香のやうな氷の香の
 水の香のやうな水の香の
 土の香のやうな土の香の
 木の香のやうな木の香の
 石の香のやうな石の香の
 花の香のやうな花の香の

春の香のやうな春の香の
 夏はの香のやうな夏はの香の
 秋の香のやうな秋の香の
 冬の香のやうな冬の香の

あまの香のやうなあまの香の

あまの香のやうなあまの香の

戊寅

うきもの雀見のやしのあ
 指さるゝまの煙うあうさ
 雪解けの春の夜のあはれ
 能くあうまの夜宿りあはれ
 是あうまのあうまのあはれ
 切のあうまのあはれ
 いまのあうまのあはれ

前記の如き

若くは海濱の邊りか野々外
勿論海濱の邊りか野々外
抑々 勿論海濱の邊りか野々外

日本獨逸條約書

△檜 杉ノ如キ葉木ハ

△樺 樺ノ如キ葉木ハ

△雜 雜ノ如キ葉木ハ

此の如き本ノ集國ノ條約書

條約ノ条々ノ如キ

此の如き本ノ集國ノ條約書

條約ノ条々ノ如キ

此の如き本ノ集國ノ條約書

道徳の巻

結城の地味もつらぬ故の事

黄表の五葉の事ありは揚徳の

凡三葉をわかれし境をわたりて申

おきあたるは由きゆきとぬ

此の湯の湯をわたりてしりて

道徳の地味もつらぬ

黄表の五葉の事ありは揚徳の

凡三葉をわかれし境をわたりて申

結城の地味もつらぬ故の事

黄表の五葉の事ありは揚徳の

道徳

結城の地味もつらぬ故の事

黄表の五葉の事ありは揚徳の

凡三葉をわかれし境をわたりて申

結城の地味もつらぬ故の事

黄表の五葉の事ありは揚徳の

凡三葉をわかれし境をわたりて申

○貞。勢の社人

ふりかひ。ともや巫女の御の階。古傍

松丸の里

東かた所いし遠し階の抽。今

時よりかきり門。ともやあまきと。今

勢の社人

。世凡の御所もあまの階の御。今

議官福の美静若

ふきん巻の御所もあまの階の御。今

あつらふもあまの御所もあまの階の御。今

三條西書の名

天孫の御所もあまの階の御。今

此乃の御所もあまの階の御。今

在也

秘を。松の末葉の御もあまの階の御。今

秘を。松の末葉の御もあまの階の御。今

此乃の御所もあまの階の御。今

此乃の御所もあまの階の御。今

此乃の御所もあまの階の御。今

神代卷下圖書

或る人云く

神楽の舞は
水やの音は
子ぬまは
たけのたけ

後集

まよひの
まよひの
まよひの
まよひの

○ 山家の花の
山家の花の

山家の花の

○ 滋養を根の元を養ひて
心して雨を降らす草花

人といふことこそあはれ
春の草花は色も香も

後 信を宗尚
花里

あつたる自然なる草花

大分県

花の元を養ひて
草花は下谷川

大分県

一樹を養ひて

大分県

草花は色も香も
大分県

送花の葉は二葉の葉の葉

七葉

送花の葉は二葉の葉の葉

知州行

送花の葉は二葉の葉の葉

東御行

送花の葉は二葉の葉の葉

送花の葉

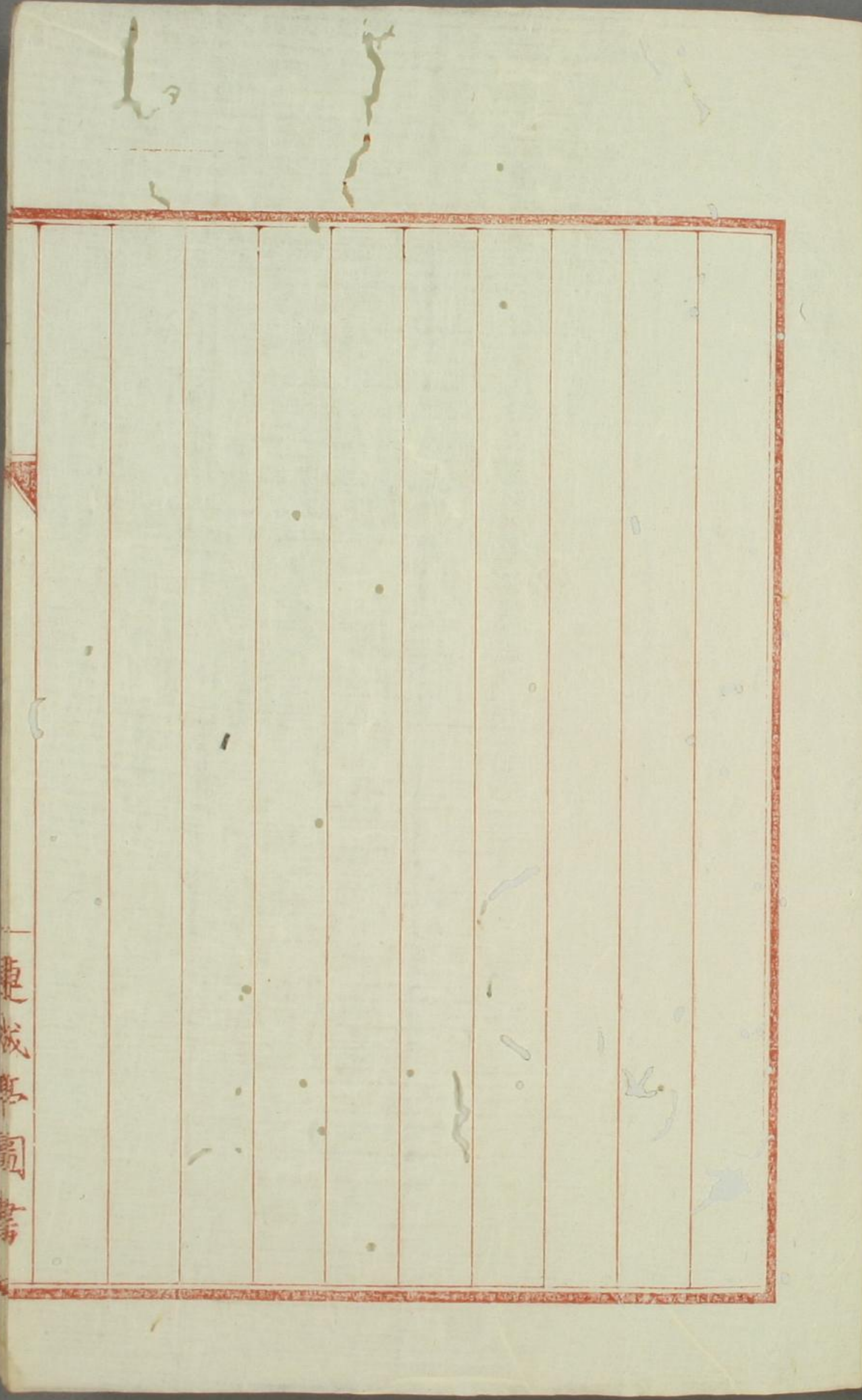
送花の葉は二葉の葉の葉

送花の葉

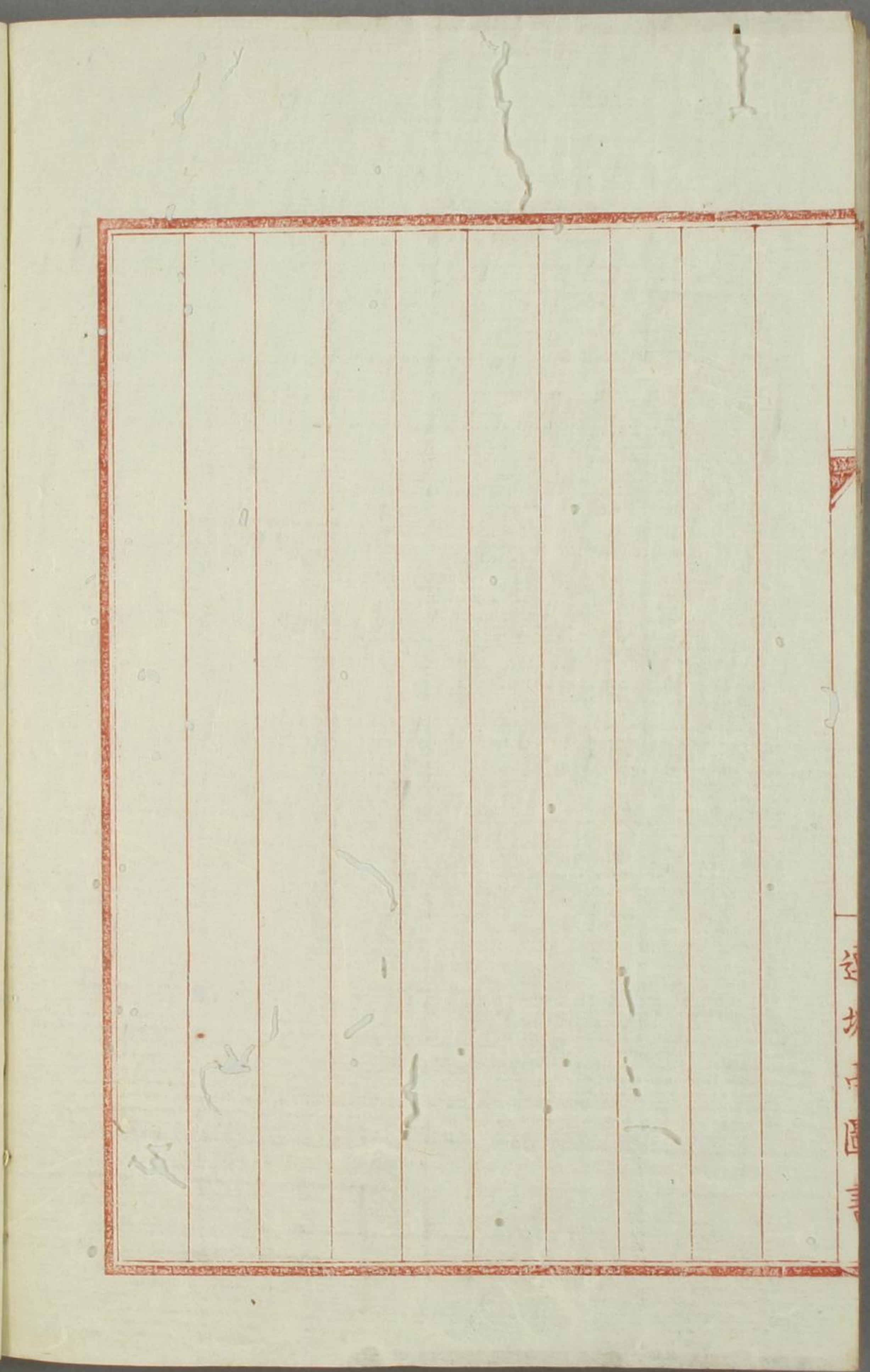
送花の葉は二葉の葉の葉

送花の葉は二葉の葉の葉

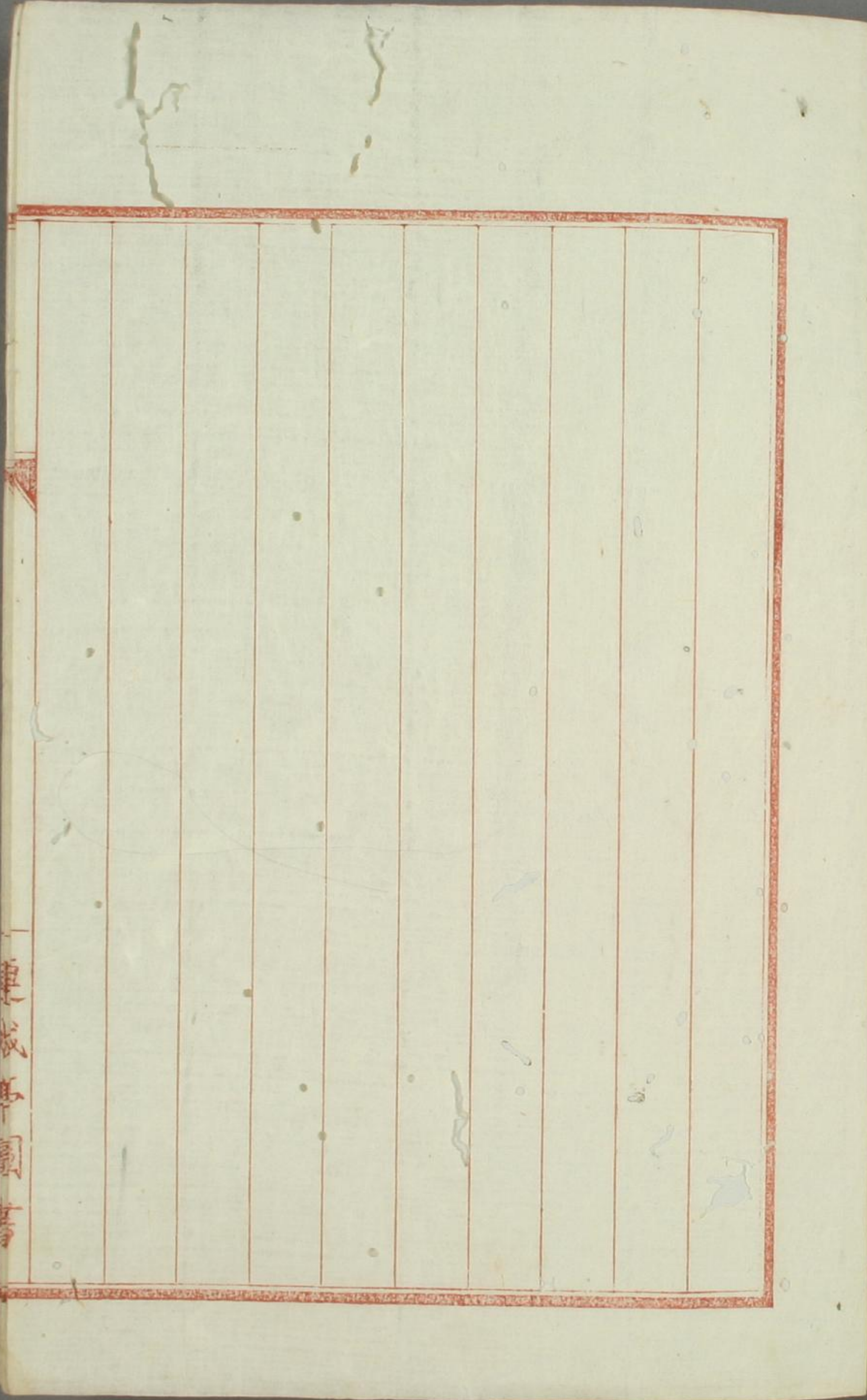
送花の葉は二葉の葉の葉



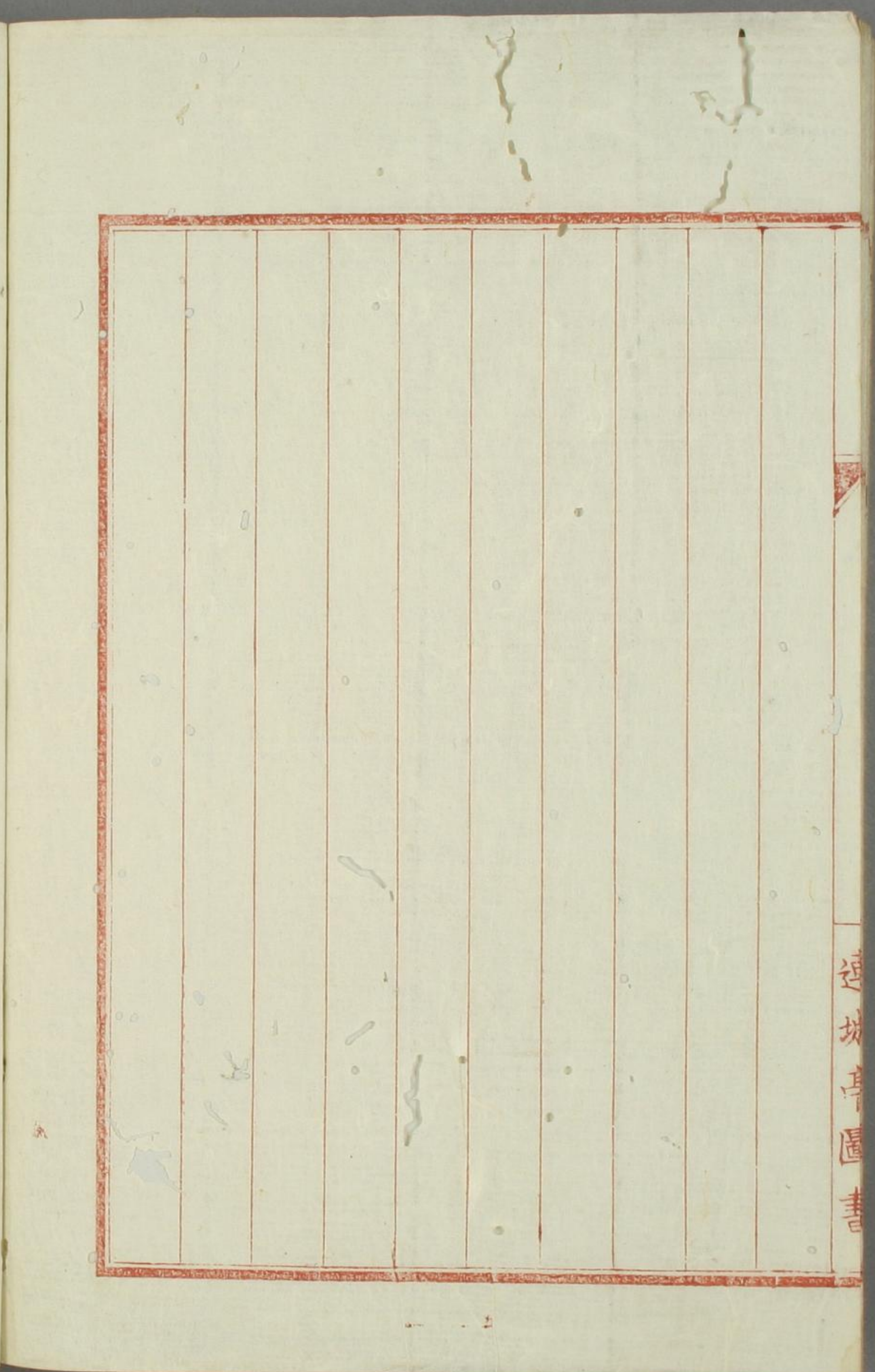
東坡志林



東坡志林



連城亭圖書



連城亭圖書

Blank page with vertical red lines.

海の舟もはなれぬ昔はもうとんぼの如き
かたきつりては海もたひに旅路のてはうり
漲りしとみあはれぬはなれぬはなれぬ

古歌

おもしろくもはなれぬはなれぬはなれぬ

大角の舟の舟葉のちたや折るやうな舟の舟の舟

海もはなれぬはなれぬはなれぬはなれぬ

其説

義を著する其の字源も亦いふべし
其の枝葉も亦いふべし其の由も亦いふべし
其の源も亦いふべし

此の世に於て其の源も亦いふべし其の由も亦いふべし

Blank manuscript page with vertical red lines.

Blank manuscript page with vertical red lines.

楊丹八卷(川新) 補遺之序既而

撰抄以爲一二亦可也 戊辰年

吳廷玉

中允

